

『閑屋津里草』

——手銭家所蔵資料紹介（八）——

佐々木 杏 里
（手銭美術館学芸員）

摘 要

出雲市大社町手銭家に伝来する文芸資料の中から、俳諧紀行『閑屋津里草』を紹介する。この資料は、大社における文芸活動の実態を見る上で、多くの示唆を与えてくれる貴重な資料である。

キーワード・閑屋津里草、手銭有秀、俳諧紀行、杵築文学、手銭美術館

はじめに

『閑屋津里草』（かやつりぐさ）は、手銭有秀（手銭家五代）、同郷の友人である時雨庵寸龍、梧桐蘭里信の三人が、奥出雲を経由して大山（角盤山）へと旅した様子を、発句と共に記した俳諧紀行である。

著者の手銭有秀（明和八（一七七二）～文政三（一八一〇））は、寛政八年（一七九六）父の死により手銭家五代目当主となり、千家家（出雲大社国造家）近習格、杵築六ヶ村大年寄などを勤めた。

号は、衝冠斎、薄庵、雅硯など。文芸、篆刻、能楽、絵画等々お

くの趣味を持ち、手銭家の蔵書形成において、大きな役割を果たしている。

俳諧に関しては、手銭家に伝来する蔵書、草稿や著述、膨大な詠草等により、有秀が日々庵浦安と共に、当時の杵築俳壇で中心的な役割を果たしていたことが分かってきたが、それに加えて、近年見つかつた各地の俳人からの書状などから、その具体的な様相も少しずつ明らかになり始めている。没後一周忌にあたって、追善句集『追善壘粟』が編まれた。

『閑屋津里草』は、有秀の俳諧活動や、当時の俳人同士の交流の一端が見えるという点でも、興味深い資料である。

〈書誌〉

書型…写本。仮綴じ一帖

寸法…縦23・5cm。横16・4cm

表紙…浅黄色。文様なし

題簽…中央無辺。「閑屋津里草」と墨書

序…時雨庵寸龍

文化八とせの夏卯月／梧桐園 里信

跋…于時文化未夏四月／日々庵浦安書

字高…16・8cm。(本文巻頭「時雨梧桐…職にして」を計測)

丁数…全24丁

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い改行も適宜改めた。概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。

難読箇所は□で示し、推定できる文字は「」で囲んだ。

虫損箇所は□^虫で示し、推定できる文字には「虫」を振った

原本の各丁数および表(オ)・裏(ウ)を()で囲み示した。

落款は()で囲み、判読できた物については記した。

推敲部分については全て、明らかに書き損じと思われるため、訂正後の本文のみを翻刻した。

参考のため、原本の図版数点を最後に示した。

〈解説〉

本資料は、手錢有秀による本文に、時雨庵寸龍、梧桐園里信による序文と日々庵浦安による跋文がいずれも自筆で添えられ、落款まで押

されているところから、完成形、或いはそれに近い一冊と思われる。数カ所の推敲部分は、単に書き損じを直したのだろう。

本文によると、文化八年(二八一)四月十四日、有秀は他の二人に先立って三刀屋へ向かい、三刀屋の松尾維中(克己庵)父子のもとで、数日を過ごしている。(松尾維中については、伊藤善隆氏による「克己庵維中追善集『蓮のうてな』—手錢記念館所藏俳諧資料(十四)—」(『山陰研究』一三、二〇二〇)に詳しい)

数日後、寸龍、里信と合流。十七日に木次から横田へ至り、十九日には日野川を渡っている。その後、大山裾野の風景、中腹にある寺社の様子などが記されるが、大山のどこまで上ったのかは書かれていない。

二十一日の午後には米子へ下り一泊。翌日、舟で安来へと向かい、松江で解散。二十三日には、それぞれ皆杵築へ戻るといふ、一週間から十日の旅程だった。

悪天候に苦勞し、難路を踏破し、道々寺社に立寄り、人々の生活や歴史に思いを馳せ、そこで句を詠むというこの旅の様子が、生き生きと描かれている。序跋にいずれも「卯月」とあることから、旅から帰って数日の内に、一気に書き上げられたのだろう。

ところで、この旅を発起したのがだれだったのか、『閑屋津里草』という題を、誰がどういう意図でつけたのか、序文、本文を読んでもはつきりしない。

題については文章を書いた有秀本人がつけた可能性も高いが、序文からは、時雨庵寸龍が題をつけたとも読みとれる。

有秀が本文を書いているのは、発起したからではなく三人の中で句文の技倆が最も高いと見なされていたから、という可能性もある。有

秀は、紀行文『いそ枕』の作者・露丸に頼まれて、清書・推敲を施している(拙稿『もくつ集』―手銭家所蔵資料紹介(二)―『山陰研究』九、二〇一六)

寸龍、里信はいずれも、姓名をはじめプロフィールがわからない。

手銭家に伝来する俳諧資料において寸龍という俳号は、文化五年(一八〇八)の連句会以前には見られない。しかし、その後の様々な資料には、有秀や浦安との親密な関係性や距離感が漂っている。そこで、文化五年以前は別号を名乗っていたとも考えられる。また、有秀の追善句集『追華罌粟』(文政四年)には、寸龍の発句は載っていないことから、文政三年以前に没している可能性がある。

里信という俳号は、『閑屋津里草』以前の資料では見られない。

一方で、手銭家六代・野塘との連句詠草は、数多く残っている。

近年、複数の人々と野塘との間で交わされた、漢詩に関連する書状や漢詩の詠草が見つかったが、その中には、「履信」「北溟履信」等と記された資料が複数ある。(参考図版6) 『閑屋津里草』本文中の漢詩も「梧桐蘭履信」作であり、履信と里信は同一人物と考えて良いだろう。

また、里信による序文中に「刀圭(医術)の…」とあることから、里信は、杵築で医師として活動していた人物で、有秀よりは年下だったかもしれない。

これらは、今後、里信について調べる上で、貴重な情報である。

〔翻刻〕

〔表紙〕

閑屋津里草

〔見返し〕

白紙

旅の世に生れて旅せさらんはと、ことし文化八のとし、卯の華の雪をわけて雲伯の飛遊をとにもするものは、薄月庵のあり秀、梧桐蘭の(1才)里信なり。前途百余里のはしめに興あり不興あり、興は興にして不興も亦旅の興なりと、邯鄲のまくらをならへし種々のことを集、是か(1ウ)はしに小序して、か屋釣草と号るものは、いさゝの濱に杖をと、めししくれ庵の寸龍也

〔日粟〕〔三眺蘭 豈旨庵 寸竜印〕

(2ウ)

白紙

(2ウ)

序

それ俳諧はもと玉傳より分れて専ら士若人の嗜む所なり。予、常にこれを好むの癖あり。茲年卯の花月の半、刀圭の暇をもて雲伯州の勝地を探らむと、同好の友なる寸龍有秀の二子を伴ひ、旅粧(3才)したりける。そか中にも有秀のぬしは、国史に味からぬ男子也ければ、徑過る所指揮せずといふことなし。まつ簸の川上の艱路を経て八岐か阪なる古き祠に詣て、鳥上の嶽を遙むかふに見なし、金巖山にかゝる。是より馴にし父母の国を離れ、塵払ふ(3ウ)伯耆の国なる角盤山に跟を企ける。抑、今たひか漫遊は初より、何地へ筈を曳へしと、預かしめ

斯したるにはあらず。唯、捨小舟寄すへきかたに泊り、求むるに或は馴くしきあるしにもてなされ、山亭の寢覺に郭公を聞、或はいふせき伏屋に終夜雨(4)風の聲、夢を驚すもいと旅の興になんありつれ。到る所「句」あり賦あり、見る所必記あり。今集めて小冊となし、号て蚊屋釣草といふ 文化八とせの夏卯月

梧桐菌

里信

(4)

時雨梧桐の両士は予か旧相職にして、つねに奈良茶の席をひとしくすといへとも、いまた杖笠の情をしらされはと、ことし此夏ひそかに頭陀のよこれをさ、やき、卯月の中の四日、二士に先達て飯石の郷にいたる。

とし月行かふ道すからも、さうの山と若葉しけりあひて(5)いと興を異にす。落合といふ所に時鳥を聞きて

川音のはなれかねたりほととぎす

三刀屋の里なる克己亭に泊す。あるし父子(6)、ちなみある風人なりけるか、おりあしく公用のさ、へありて雅筵をものさること、いとほゐなし。仁多の郡なる(5)岩屋寺にこゝろさすことなど物かたりければ、主人あとつかた、かの地のほとりに杖をひかれける紀行をみちしるへにも、とてあたへらる。千々にこと葉の華をさかせ、菅の根のいとなかくしければ、こゝにしるさす。

また横山国子は簸溪のからふみをおくらる

(6)

簸溪路一掛層巒爆水

雷鳴捲紫瀾壘石為梁

人稍度穿巖通道馬猶

難匹靈廟畔烟霞起八
蛇洞中雲靄寒此地国
風歌就処即今仍作旧
時看 青藍

(6)

二つの玉もの頭陀袋におさめ、二士の来るをまちて同し中の七日、木次の驛に入。是よりいはゆる簸の溪をのほること、凡三千五百歩、数十曲の流をわたるに、あるはもや橋、あるいは丸木橋、また石を置みてゆき、のたすけとす。断岸絶壁松柏森々と、あめさへ降て心ほそし。

簸の溪や一雲さかむ華卯の木

(7)

さみたれや簸の溪川の水けふり

時雨庵

簸の溪や若葉をくゝる水の音

梧桐菌

大蛇のすみけるむかしをつふやき、八岐といへる所に出る。

道のほとりに茶店あり。餉とりちらし、しはしやすらふに、傍に社あり。八重垣の明神となん。やかて、神前にぬかつきておのく

八重垣や卯の木の露のかゝる袖

時雨

八重かきや音も溜たる夏神楽

梧桐

蝙蝠もさてつまこめに通ふらむ

(7)

ほと、きすを聞て

はらくと笠の雫やほと、きす

梧桐

や、雨はれて道をいそくに、また深き谷底に入木の下聞しけりあひ、空さへ曇て物凄し。人家絶て道問ふへくもあらねは、只見分ヶの石を力になして、峯にのほり溪に下り、辛きわらくつのやふれを厭い、落日近き(8)笠の緒ひきしめて、漸横田の驛にやとりをもとむ。

みしか夜をしたり只なり合歡の花

川音は白ふなりけり梅雨の月

時雨

明れは中の七日、兼て願はしかりし金巖山にこゝろさす。田植のおの子の踏あらしたる細道を行過て、ふもととなる横田八幡宮に詣拜す。廣々たる馬場先一面の(8ウ)きり芝、いと、神さひ物しつかなる。社殿にぬかつき、やたての筆のきれく(9オ)なるをかみて雨晴を祈る。

麦秋の雨や御こゝろますならば

宮司なる木山何某に立寄、岩屋蜜寺の宝物を乞ふ。あるし、いとねもころにうけかひ、我々に先達てのほる。一山、ものふり老杖かけ闇く古松道を覆ふ。(9オ)奇木異草さまく(9オ)に苔深くして岩滑也。八丁行きつきて石壇あり。けはしきこと真すかきに通たり。足をふるひ汗を流して本堂に詣拜す。本尊十一面観音、行基菩薩の開基にして聖武天皇の勅願所也。寺料三十石も加るより、打続、国主御代々寄附あらせらるよし、まの(9ウ)あたり見ゆ。院の左に大師堂あり。廿歩はかりよちのほれは、大き十尋はかりの巖閣の左に時かさして下に蔵王権現鎮座まします。岩の碁を匍匐ひて頂に登れば、四方を見はらして横田の郷一望のうちにあり。名にあふ鳥上の嶽は東南にあたれるよし。雲霧のためにむなくしてこたひの残念いふはかりなし。(10オ)むかし空海大師巖上に蜜法(10ウ)を興して紀伊の高野に飛去給ふよし、かたり伝ふ。うしろのみねに行基菩薩の堂あり。また二百歩はかりにして智明権現の社あるよし。是を奥の院とす。かれ是の拜所に時うつれば、見残て院に下る。木山何某待受て宝物を開帳す。第一たるは滝見楊柳観音尊像、大唐の仏画師張思恭の真筆(10ウ)にして掛地の長さ八尺余幅五尺あまり、金銀丹青を鏤め名譽の筆意をふるへり。往昔鎌倉二位の尼将軍寄附し給ふとかや。其後、大主綱隆尊君、錦繡のめてたきをもてはくをつくろひ給ふのよし。たくみなき良宝也。又弘法大師真蹟

の法華全部黒漆金紋の箱に納めたり。猶おほよその(11オ)宝物見るにいとまあらねは、辞して一間を出る

金巖山法樂

しけりあふ闇をひらくや法の聲

梧桐

松かせに耳を洗ふてほと、きす

時雨

関伽棚に若葉の月の雫かな

岩巖山上月光明

(11ウ)

瑗殿聳空接大清

相伝聖主一婦仏

遺蹟長留古梵城

右 梧桐蘭履信

おのく矢たての墨して持奉るに、木山何某、たにさく得させよとあるに、いなみかたくてかいやりぬ。昼のものなともて(12オ)なされ、しはらく院内に息を入て山を下り、東北をさしてなを山深くわけ行に、松杖一もともなく、た、新樹生しけり、谷水滔々として闇きをゆくかことし。峠にのほりて雲伯の境あり。峯平に樹石容を異にす。十年畑てふ所には、はや暮近くおほゆ。

雨の夕宿かし鳥にとはまほし

時雨

(12ウ)

なと興しつ、山を下り農家にやとる。

明れは中の九日、空いさ、か晴て朝とく立出るに、数峯を越して、漸郷に出る。日野川は水かれて、あやしき板橋を渡り八幡宮に詣。境内二百歩四方、道をいそぎてことをしるさす。八丁はかりにして左にわかれ、細き流をわたりて、まき原といへる角盤山の裾野にかゝる。一

面の小芝、千筋のみち、廣々として^(13オ)はてをしらす。折ふし草に
よろひふしてはゆく。三里の間、目あての松の外に樹木一本もなく、
山の半腹に行つきて小石原にか、れは、大き丈六はかりの銅花表あ
り。左右の院に石壁をならふ。日既没て物のわひためもしらは、
傍なる茶店に立寄やとりをもとむ。雪風いとせく、夜のものした、か
にかりて臥す。茶店の若もの、い、けらく、当山は^(13ウ)他にこえて
高く、仲秋の頃より雪降初て、霜ふり月の末には丈六はかりにつもる
はとしくのこと也。いたく降れば二丈に及ふとなり。冬月はわざと
てもなければ、た、雪をうかちて明窓をひらき、院々の通路をもと
むるのみ。又高木の枝を卸し、雪車につみてひき、にくたす。土壁は
霜雪の患あるゆへ板を二重にはりて土砂を^(14オ)いる、其ほか水豆
腐、氷こんにやくのたくぬ、心よしとなん。夢にたも見ぬ北国白山た
て山の佛思ひやりて、感るはかりなりけり。

廿日朝、とく茶店を出るに雪霧たちこめて十歩の先を見す。雨横さま
にふ「^(14ウ)りて」みの笠の詮さへもなからしむ。心ほそくもまつ本堂に
よちのほる。三しめ四しめの老杖更に丈余の根腰をあらはし、深^(14ウ)
を^(14ウ)わけて社殿を礼拝す。道をわりね^(14ウ)くやすらひ無事を祈
るに、や、空晴て堂閣きらひやかに見へわたれば、また七尋余よち
のほちて、東照権現の神社に詣す。左に右に下りは本社智明大権現、
北面に鎮座まします。幅八尋余りの石壇斜に築たり。蓮葉の手足鉢、
口のわたり六尺はかり、唐銅の鑄もの鉄のくさりもて、四つの柱に
つ^(15オ)なきたり。壇をのほれば銅の燈籠左右にあり。此三つは大坂
の何某か寄附する所のよし。まためかけの石もて丈八はかりの宝塔あ
り。因伯の大王寄附し給ふとぞ。本社はおほよそ五間、四面前に十有
八間の拝殿を造かけたり。金壁荘厳きらひやかに堂閣棟を争ふ。各心

を清め百拜して法樂し奉る^(15ウ)

露をわけて若葉拜む且かな

時雨

夏籠や虚も尊きみねの雪

梧桐

岩藤や氷を堀てから手水

本社の上に下山権現軻遇突智命鎮座まします。伊弉册尊、此御神を生
まし、時焦れて神去給ふこと国史に見へたり。よてこの国を母焦の州
と名つく。つ、めて今は^(16オ)は、きの国といへり。本坊清楽院は焼
失して当時かり家なるよし。其跡廣々たり。立寄て一山の画図を乞受
ぬ。そも当山の来由をたつぬるに、一山天台宗日光山の末にして、本
坊清楽院に院代諸大夫を下し給ふ。寺料三千石、伯州におゐて寄附あ
らせらるよし。社殿十二宇、山内四十二坊。当時はへして二十四坊。
全し社地は山の半腹にして^(16ウ)絶頂にのほること三里、是を八乗峯
となつく。毎歳、みな月中の四日、若僧三人登山す。前に一百日の物
忌読経して、当夜月の光りを待てみねに至る。山上のことは、秘して
かたらぬおきてなるよし。あくる十五鳥異草氷を取て下向す。一山集
り籊をたきて河原に待といへり。其外、三幽山、劔ヶみね、馬頭ヶ
峯、兜山、鷲の山、船上山、不動瀧、百尺かね岩の^(17オ)窟曲かそふ
るにいとまあらず。西南の眺望は山氣にさへられあきらかならねと、
三瓶山のみ西天に聳、其外連山波濤のことく隠々としてわきかたし。
夫より左の谷川に下りて、切通しといふ所をよきる。数十丈の巖壁、
左右に欹、空天にかさして切岸よりもあやうし。岩窟に地藏尊しま
す。礼拝して向ひの地に入。白山権現、阿弥陀堂、文殊堂^(17ウ)
拜所をめぐりてもとの茶店に立より、うちつれたちて、かのまき原を
西北に下る。

二里余にして赤松の池にのそむ。わたり二丁はかり、岸高く古松枝を

垂れ朽たるものはなかわに沈む水色盈々として更藍を揉かことし

水に揉る蓮の糸のいく尋と

(18才)

池の左を下りて赤松村に出る。尾高といへる驛に立寄やすらひて、又日野川をわたる。

午時過る頃、米子の城下に出て、からつや何某かもとにやとりをもとむ。此ほど嶮難の疲をものせんと、醇醪一壺を乞ひ来て山上満足の祝意をうたふ

薄月庵

心よく草臥にけりなく水鶏

(18才)

卯花に曇る星の明ほの

時雨

風流のもれたる塔の混なれや

梧桐

やつれし馬ののらくと出る

月

後めたく庵に月のさしのほり

雨

露にしほる、あみかたのつれ

桐

古いもの、みせにことしの秋暮て

月

奇麗に溜る砂川の塵

雨

下署

(19才)

表八句をあはせて枕によれば、雷鳴しきりに雨車軸をなかつ。馬を商ふもの泊りあはせて、我々か枕もとなる土壁ひとへに荒馬をつなきたり。夜た、ひしめきてかしかましければ、翁の奥羽行脚をおもひ出、かたりあふて興とす。はたこのところには一枝、倭風、尾白庵などいへる風人も聞へたれと、しのへる身なれば、ほゐ(19才)なくも訪ふことを得ずして、明れば末のひと日、小船にさほさして雲陽安来の驛にわたる。

折ふし波風あらく船人にしかくのことをいへす。さらに恐るゝにた

らすとや、笑ふてこたえす。南谿か旅行の五誠心にうかひ、眉をひそめて黒鳥の岸につく。此あひさらに目とまるかたもなければ、わらしひきしめ、荒嶋の松横に(20才)見やりて府にかへる。夫々の用ありて、こゝに頭陀をと、むるあり、杖をひくあり、はらくに立わ

るゝとて

わかれ行峠になくやかんこ鳥

梧桐

同廿三日は、みなく家にかへり親族風友よりつとひ、無事をよろこぶ。(20才)

日黒みの

笠を集めて

笑ひかな

薄月庵 あり秀

〈錢雅硯印〉〈薄庵〉

(21才)

〈白紙〉

(21才)

粵に風友薄月をはしめ時雨梧桐の人くひ□に藁沓のひも引しめ唯かりそめにふる里をうかれ出つゝ、つゐには、きなるおほやまの雪まてを見て帰り来しは、(22才)卯月末の三日になん。そも岩屋寺の美景木山氏かしんせちに、からつやかもとのおかしみまで筆まめに書と、めて、かやつり草となつつけし物あり。かねてやつこもあしのかり寝をもにせはやと其(22才)根のふかく契りけりも、折ふしやまひありて口おしく心をやり、臂を曲て、帰路の無事をまち侘しに、なを此小冊を見て残懐かきりなければ、しりへにそのことをかいつけて、旅ころ(23才)かさなるうらみをはらすのみ

『閑屋津里草』―手錢家所藏資料紹介(八)―(佐々木杏里)

于時文化未夏四月

日々庵浦安書 へ へ(浦安)

(23ウ)

(付記)

本稿作成にあたっては、松本美和子氏、立正大学 伊藤善隆氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」(二〇二二―二〇二四年度、代表・田中則雄)による研究成果の一部である。

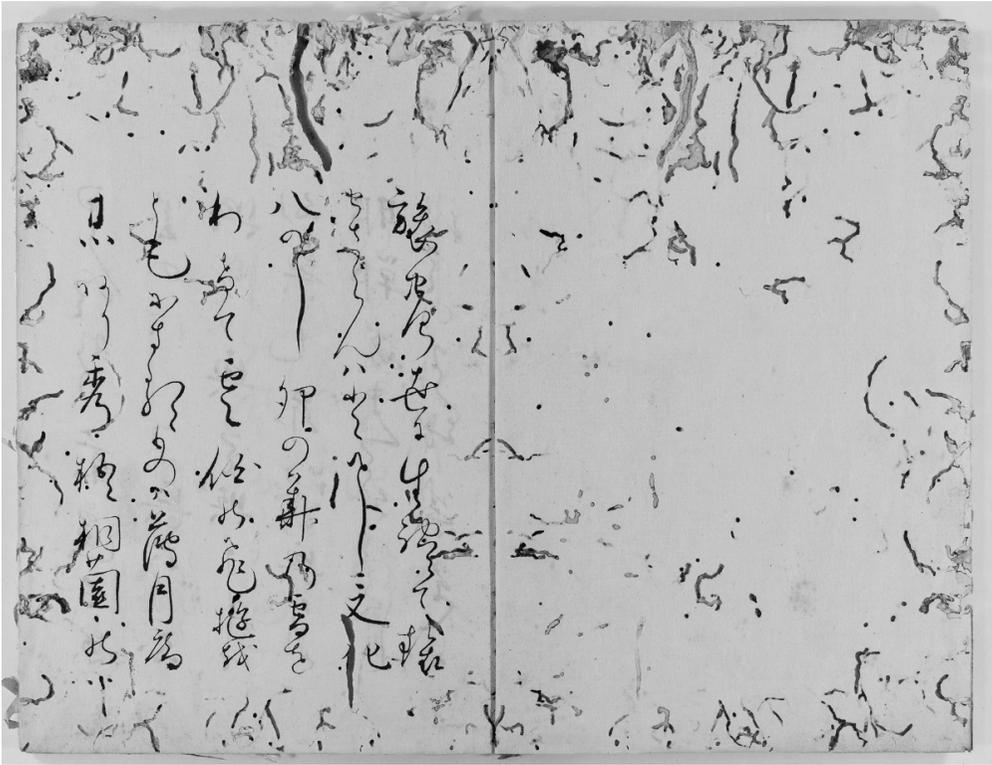
〈参考図版〉

1 表紙

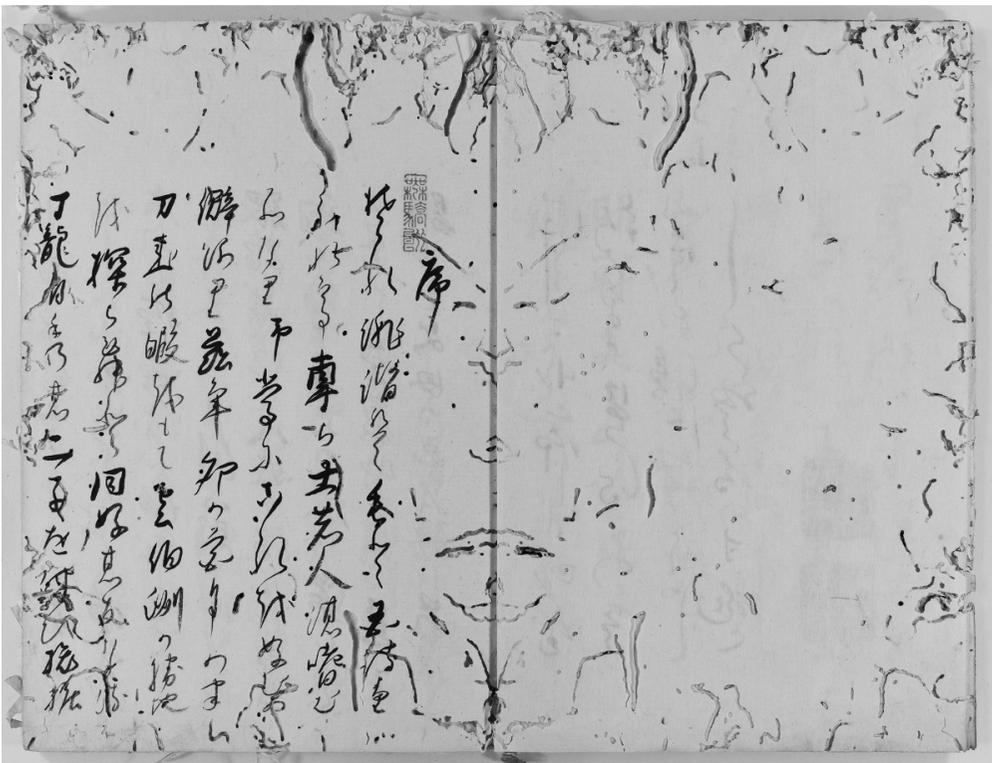


一一一

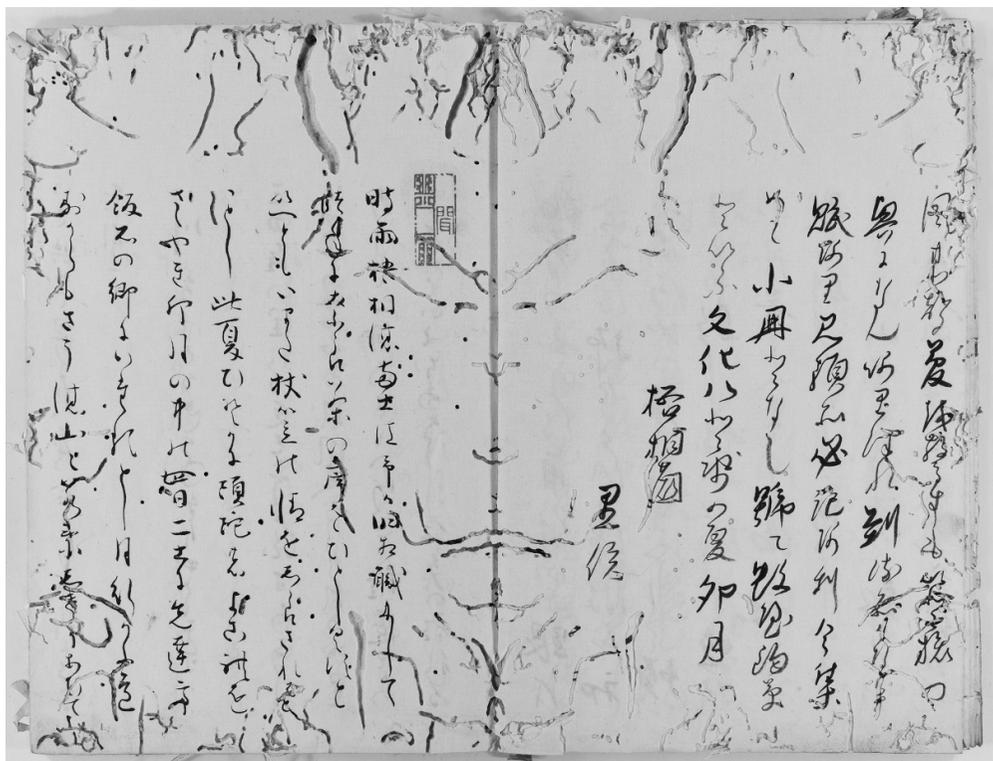
2 序文冒頭(時雨庵寸龍)



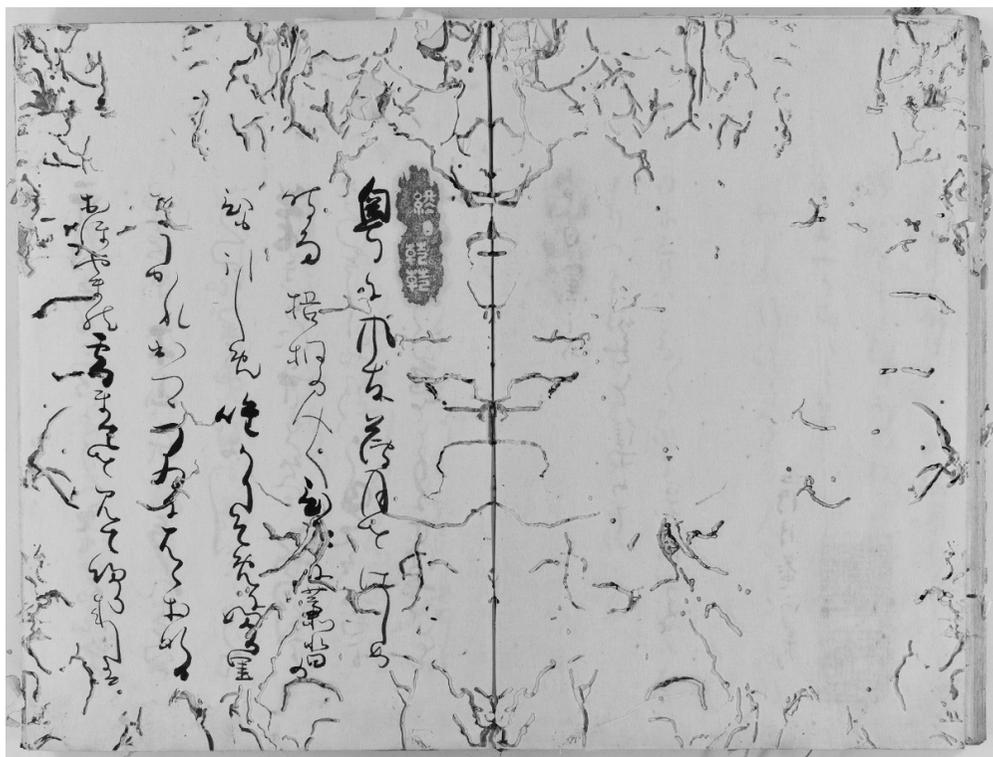
3 序文冒頭(梧桐蘭里信)

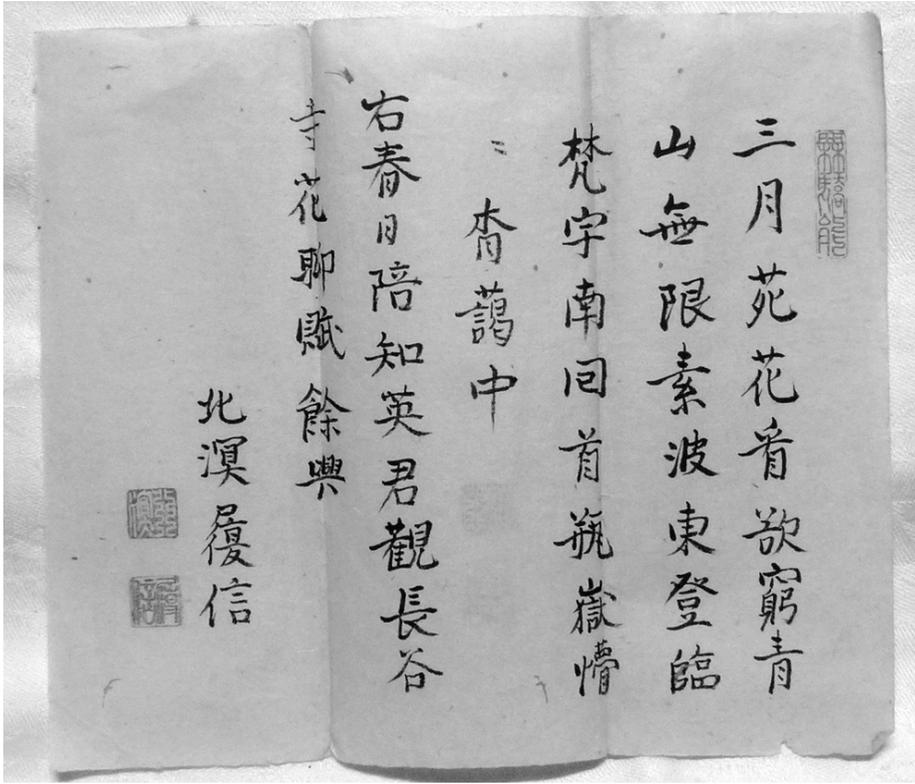


4 本文冒頭



5 序文冒頭(日々庵浦安)





『閑屋津里草』—手錢家所藏資料紹介(八)—(佐々木杏里)

“Kayatsurigusa”
—reprint and introduction;
Documents of Tezen Family Archives (8) —

SASAKI Anri
(Tezen Museum)

[Abstract]

To reprint and introduce “Kayatsurigusa” written by Arihide Tezen. “Kayatsurigusa” is a valuable material to know about haikai poems in the Taisha region of Edo period.

Keywords: Kayatsurigusa, haikai, Kiduki-Bungaku, Tezen Arihide, Tezen Museum